

近郊建売住宅の住まい方について (その1. 調査対象の概要)

○井上洋子(精華女子短大) 久保加津代(香蘭女短大)

坂本久子(近畿大女短大) 岡 俊江(九大)

目的 第3期住宅建設5ヶ年計画は、それまでの水準をのりこえるべく「1人1室、1世帯1共同室」というスローガンを打ち出した。住宅計画の面でも、食寝分離型から公私室分離型への認識が一般的になってきたように思われる。しかし実際には、公的空間のあり方について未検討の問題が多い。だんらん室における接客行為をどう評価するかという点もそのひとつである。

本研究は都市近郊の1戸建住宅居住者(サラリーマン階層)の住まい方について、とくに居間とぐしきの使い方を中心に実態調査を行ない、その分析をとおしてこれからの住生活の中でだんらんと接客が占める住空間のあり方を考える資料とするものである。

方法 アンケート調査(調査地:福岡県宗像郡F町W住宅団地、調査時期:1979年3月、調査対象戸数155、調査紙配布数136、回収数127、有効回答数125、)

結果 調査地は福岡市と北九州市の中間に位置し、いざれへも1時間内外の通勤圏にあるベッドタウンとして、民間大手不動産業者により6年前から開発がすすめられている。対象とした住宅は延床面積74~105 m^2 の3LDKおよび4LDKタイプで、南面する洋風居間と床の間付き和室(ぐしき)をもっている。これらの中で居間が隣の和室と続き間になっているものが割近くを占めるが、ぐしきは割近くが独立している。台所はDKタイプが多く(84%がDK+L型)、北側にある。居住者は、世帯主の6割が39歳以下で、平均家族数4人、老人を含む世代家族は20戸だけである。子どもの年令も低いせいか、共働き家庭は少ない。